

初声町三戸地区の谷戸の重要性

瀬能 宏 (学芸員)

京浜急行の三崎口駅を出て国道134号線を左へ進み、三戸入口交差点を右折してしばらく行くと、左手に目を疑う光景が広がっています。かつて水田のあった谷戸は面影もなく、完全に埋め立てられて赤い土がむき出しの広々とした造成地に変貌しています(図1, 2)。そして、対照的なのがこの造成地の東側に広がる緑の濃い谷です(図3)。造成地の東の縁に沿った崖の上と谷の底では、標高差が数十メートルはあるでしょうか。ここは三浦市初声町三戸地区、緑の濃い谷は残存する谷戸で、北川の源流域にあたります。谷戸の底部を流れる北川の本流は、崖の下で造成地の地下に潜り込み、長い暗渠を通して造成地の西側で地上に出ますが、すぐに三面護岸の水路となって集落に入り、最終的には相模湾に注いでいます。この緑の濃い谷も、いま、正に埋め立てられる寸前なのです。

温暖な気候と相模湾を臨む風光明媚な土地柄、そして三浦半島南部の玄関となる三崎口駅から近いことから、真っ先に開発される条件を揃えているとは言え、生物の多様性や保全についての認識が高まりつつある昨今、これだけの規模の環境破壊が進められつつある現実には呆然としてしまいます。この地区の開発規模は、かつて湘南国際村建設によって失われた自然環境に匹敵する規模とさえ言えるでしょう。

この北川源流域の谷戸は、有名な「小網代の森」とは尾根を挟んですぐ北側に



図1 初声町三戸地区の谷戸の航空写真。中央の南北に延びる直線上の崖から西側がすでに埋め立てられ、赤い表土がむき出しになっている。崖よりも東側に広がる緑の濃い部分が北川源流域。南側に広がる緑の濃い部分が小網代の森。Google Earthより。

位置していますが、小網代の森とは対照的に、その自然環境や生物相については、これまでまったく注目されてきませんでした。筆者は、最近になってこの場所が神奈川県内では希有な自然環境が残されており、保全上きわめて重要な地域であるとの認識を持つようになりました。ここではその理由を3つに整理し、広くその保全の必要性を訴えたいと思います。

【理由1】絶滅危惧種の存在

神奈川県レッドデータ生物調査報告書

2006で絶滅危惧IA類に指定されているメダカ(図4)や、同書で準絶滅危惧種に指定されたハゼ科のクロヨシノボリ(図5)といった魚類だけでなく、昆虫では絶滅危惧IB類に指定されたヤンマ科のサラサヤンマ(図6)が生息しています。神奈川県では酒匂川水系の用水路に生息するメダカが唯一の在来個体群であるとして注目を集めてきましたが、実は北川とその周辺にもメダカが生息していることが最近の調査でわかってきました。この地域のメダカは、「三浦めだか」と



図2 造成が進む谷戸の西側。谷を埋め立てたことが想像できないほどに変貌している。2007年5月26日、瀬能宏撮影。



図3 ヨシが繁茂する谷戸の底部。底質には水がたっぷり含まれている。2007年5月26日、瀬能宏撮影。



図4 いわゆる「三浦メダカ」の雄, KPM-NI 17925, 北川産, 瀬能 宏撮影。



図5 クロシノボリ, KPM-NI 18972, 北川産, 瀬能 宏撮影。



図6 サラサヤンマ, 厚木市, 2000年6月, 荏部治紀撮影。

呼ばれており、2003年に発表された全国的なメダカの遺伝子分析の研究では、南日本集団の中でも東日本の太平洋岸を中心に分布する遺伝子を持つことがわかっています。また、サラサヤンマは、かつては隣接する小網代の森に多産しましたが、現在では遷移による乾燥化が進んだことで生息環境が悪化し、個体数は減少の一途を辿っています。そのため、現在では北川の個体群の重要性が急速に高まりつつあります。この地域の生物相については、魚類やトンボといった大型で目立つもの以外は未調査のため、情報がほとんどありません。今後、緻密な調査により、保全上重要な生物が他にも発見される可能性がきわめて高いと考えられます。

【理由2】規模の大きな湿地環境

神奈川県内の平野部は、ほぼ全域で都市化が進んでおり、埋め立てやすい湿地環境は壊滅状態と言ってもよいでしょう。湧水が豊富な地域でも、用水路が整備され、自然の湿地の代わりをしていた水田は乾田化し、水辺の生物は衰退の一途を辿っています。谷戸も例外ではなく、水田が放棄されることで遷移が進んで乾燥化してしまったり、谷戸そのものを宅地として造成する事例が後を絶ちません。現在県下の湿地とえば、わずかに残る休耕田と、都市近郊の保全されたごく一部の谷戸に見られるだけとなってしまいました。このような状況下で、北川源流域の湿地環境は、特筆に値するほどの規模を維持しています。実際、谷底に降り立つと、冬でも水は豊富で、谷底全体が水を含んだ湿地であることを実感できます。水田が放棄されてからかなりの時間が経っていると思われそうですが、現状ではまだ遷移がそれほど進んでおらず、良好な湿地環境が残されていると言えるでしょう。枝沢との合流点付近では、相当にぬかるみ、歩く

のに苦労するほどです。

【理由3】生物進化の実験場

今から12万5千年前、この地域を含む三浦半島南部は、温暖期に起こった下末吉海進によって水没していました。その後、土地の隆起や寒冷化による海退によって陸地化が進み、特に1万8千年前の最終氷期の最寒期には、海面が現在の汀線から120mも下がったことがわかっています。この時、東京湾は干上がってしまい、関東平野の大きな川は1本に集まって古東京川となり、太平洋に注いでいたとされています。その後再び後氷期の最温暖期を迎え、6,500年前の縄文海進の時には現在の土地の海拔4mまで海に覆われました。神奈川県では、こうした地質学的イベントが詳しく研究されており、かつての海岸線を正確に復元することができます。メダカのような平地に住む生き物では、こうしたイベントが分布の拡大縮小、さらには進化的に重要な単位となる集団の遺伝的特性に大きく影響します。今後、遺伝子の分析に基づく分子系統地理学的な研究が進めば、その地域の生物相がどのように形成され、遺伝的な分化を遂げてきたのかを解明できるかもしれません。この地域はいわば生物進化の実験場とも言えるのです。

北川源流域と小網代の森との違いは

隣接する小網代の森を歩くとまず感じるのは、谷の底部は薄暗く、全体的に勾配が強いことです。森の規模は北川源流域よりも広く、土壌は湿潤である一方、下流部の平坦な場所は狭く、しかも遷移が進んで乾燥気味です。谷の底質は礫が主体で、日光の不足から、岸には水中から葉や茎を空气中に伸ばす抽水植物はほとんど見られません。水生動物ではエビ類は豊富ですが、メダカは生息していません。これに対して北

川の源流域では、森の規模は小網代ほどではなく、土壌も乾燥気味ですが、その一方で谷の底部は平坦で広く、かつ湿潤で、天空が開けて明るいことが特徴と言えるでしょう。底質は泥が中心で、岸には抽水植物が繁茂しており、現存する谷戸の下流側を中心にメダカが生息できる環境が整っています。北川源流域と小網代の森は、それぞれ違った環境の特性をもち、保全上はまったく別の地域として考える必要があるでしょう。小網代の森は保全するのだから、北川源流域は埋め立ててもよいだろうという意見もあるかも知れませんが、その論理は通用しないのです。

後世に禍根を残さないために

神奈川県内では希有な存在となってしまった湿地環境を初声町三戸地区の谷戸で保全できるかどうかという問題は、開発を進める側の企業倫理がまず問われることになるでしょう。本当に必要な開発規模なのか、そしてその行為が神奈川県に残された数少ない貴重な自然を永久に失うことと比較して正当化されるのかどうかを再検討する必要があります。また、この問題は大きさでなく生物多様性条約の締約国としての文化程度を問われることにもなります。自然環境の大切さを理解できるかどうかは、大局的には人の価値観に帰する問題であり、その価値観の醸成には教育水準が大きく関与していることは論を待ちません。いま残されている環境を自然の大切さやおもしろさを未来に伝えるための教材として活用する道を、研究者の助言のもと、企業、自治体、市民が一体となって探ることはできないのでしょうか。後世に禍根を残さないためにも、北川源流域の保全に向けての行動を緊急に起こす必要に迫られているのです。